

João C. Prola, Joseph B. Kirsner
両博士著 Handbook and Atlas of
Gastrointestinal Exfoliative Cyto-
logy が The University of Chicago
Pressから出版された。私が先ず第1
に思い出したのは約20年前胃内視鏡
に足を踏み入れた当初唯一の胃内視
鏡の参考書、否パイブルとして何回
もくりかえし熟読した R. Schindler
博士の不朽の名著 Gastroscopy の出
版元が University of Chicago Press
であったことである。

シカゴ大学 消化器 内科は W. L.
Palmer 教授以来 20 数年に亘り多数
の細胞診研究者をそだて、消化器細胞
診に関しては数多くのユニークな
業績を発表し、Rubin, Raskin, Klay-
man, Barton, Taebel 博士らのすぐ
れた指導的 消化器 細胞診学者を輩
出、米国は勿論世界の消化器細胞診
のメッカであった。私どもも小林、
吉井、服部博士らを派遣し、彼等と
協同研究をつづけて来た。

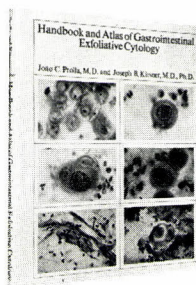
Prola 博士はシカゴ大学消化器内
科の主任教授であった Kirsner 博士
のまねきにより再度シカゴ大学へ赴
任し、Kirsner 教授のもとで Nor-
land 博士の後を襲って消化器細胞
診研究室の Director となり、細胞
診の実際、研究開発と後進の指導に
あたって来た。現在はシカゴ大学を
辞してブラジルのポートアレグレ大
学医学部の助教授の職にある。

本書では、第1章に消化器剝離細胞
診の歴史的背景をのべ、第2章は
消化器剝離細胞診手技につき、細胞
採取法、各種染色法、観察所見の判
読記録法をのべ、第3章においては
シカゴ大学における食道洗滌細胞
診、胃洗滌細胞診、食道、胃直視下
細胞診、胃癌集団検診における細胞
診応用の有用性、十二指腸ドレナ-
ージ（セクレチンテスト）と細胞診、
十二指腸ドレナ-ージ（コレシストカ
イニン胆ドレナ-ージ）及び大腸細胞

□書 評□

Handbook and Atlas of Gastrointestinal Exfoliative Cytology

著：João C. Prola, M. D.
and Joseph B. Kirsner,
M. D., Ph. D.



愛知県がんセンター 第1内科
春日井 達 造

診に関する広範な経験と成績をの
べ、長期 follow-up によりこれら成
績の評価を行なっている。最終の第
4章では細胞診における悪性細胞の
criteria、消化管粘膜の良性及び悪性
剝離細胞の形態、消化管悪性リンパ
腫細胞と Reactive Lymphoreticular
Hyperplasia の細胞診について詳述
し、末尾に 200 有余の消化管剝離細
胞の美しいカラー写真よりなる細胞
形態学アトラスを集録している。

更に著者らは研究者の便宜のため
300 余の参考文献を集めており、普
通欧米出版の医学書にみられがちな、
わが国文献の無視と切り棄てがなく、
すぐれた日本文献は比較的忠実に拾
いあげてある。勿論著者らが邦文文
献に直接目を通したとは思われないが、
日本人医師を通してこれらの文献の存在
を知ったのだろう。

さて、わが国消化器細胞診の現況
をみると6、7年前とは全く様相を異
にし、ファイバースコープの開発

改良と手技の進歩により胃は勿論、
食道、十二指腸、結腸、直腸から小
腸にいたるまで、直視下生検が盲点
なしに容易に実施され、その正診率
は98%に達し常に95%を下らず、直
視下細胞診のそれに比肩し、あるいは
上回るにいたった。従って、現在、
これら消化管悪性腫瘍に対しては、
細胞診は生検に first choice の座を
ゆずり、2nd choice となり、症例
により例外的に実施されるに過ぎない。

著者らは従来のスタンダード法に
よる十二指腸膵胆道細胞診で182例
中陽性107例、陽性率58.7%の成績
をのべているが、私どもの現在、生
検実施の困難な膵胆道系悪性腫瘍の
乳頭挿管による直接採液細胞診を検
討しているが、その正診率は60%前
後にとどまっている。今後この方面
の細胞診は重要で本書に学ぶところ
が多いと思う。

米国は言うに及ばず世界のトップ
の座を占めてきた消化器細胞診研究
室における20余年に亘る長い経験と
広範な成績に基づいて記述された本
書は病理、細胞診、消化器並びに外
科の専門家さらに癌の研究者、細胞
診に興味をもつインターン生や学生
の必携の書になるであろう。主とし
て欧米における消化器剝離細胞診の
発展のあとをたどり、その現況を知
る上に好個な著書であるばかりでな
く、それにも増して多数の美しい消
化器癌剝離細胞の大形カラー写真が
本書の一大特色として私どもの眼を
奪わずにはおかぬ。消化器細胞診
を志すものの座右の書として推めた
い。

(The University of Chicago
Press 社刊)

★ ★ ★

胃と腸 1974年1月